京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（３年計画の２年目）

1. 研究課題

東アジア災害人文学の構築

Establishing disaster humanities in East Asia

2. 研究代表者氏名

山　泰幸

Yama Yoshiyuki

3. 研究期間

2021 年 4 月-2024 年 3 月(２年目)

4. 研究目的

現代社会は、気候変動にともなう大規模自然災害、地球規模で進行する環境破壊、いままさに人類の脅威となっている感染症など、続発的に襲来し破壊とそれゆえに再創造の契機をもたらす強大な力、総合防災学者の岡田憲夫が提唱する“PersistentDisruptive Stressors(PDSs)”に曝されている。

地理的に隣接し、歴史的に深い影響関係にある東アジアは、気候条件において共通の基盤を有し、自然災害にも共通する特徴があり、人的・経済的な緊密な関係性は、今般の感染症の流行とその対応にも現れている。少子高齢化や過疎問題など共通する社会的課題も多く、これらを東アジアに共通する“PDSs”として包括的に捉えることが可能である。

本研究の目的は、「災害」を広く“PDSs”と捉えて、東アジアにおいて積み重ねられてきた災害対応の歴史を総合的に検討し、災害をめぐって歴史的に形成されてきた思想や文化、社会関係などを、“Sustainability の実践知”と見なして、東アジアに共通する特徴と地域ごとの展開の諸相の解明を通じて、「東アジア災害人文学」の輪郭を描き、方向性を示すことにある。

Modern society is being adversely affected by serial invasions, such as large-scale natural disasters triggered by climate change, environmental destruction on a global scale, and infectious disease outbreaks that threaten humankind. Thus, we are exposed to “Persistent Disruptive Stressors ”(PDSs), which constitute a powerful force that drives re-creation, as advocated by Norio Okada, a comprehensive disaster management scholar.

East Asian countries are geographically contiguous , have close historical ties, and share similar climatic conditions, resulting in a similarity among natural disaster characteristics.

This human-economic relationship is also evident in the current pandemic and responses thereto. Moreover, since East Asian nations have a number of social issues in common, such as low birth rates, aging of societies, and population decline, it is possible to comprehensively understand these East Asian characteristics as common PDSs.

The purpose of this study is to 1) broadly identify "disasters" as PDSs and comprehensively review the history of disaster response in East Asia; 2) investigate common characteristics of East Asia and different regional aspects by considering historically formed thinking, cultures, and social relations in respect of disasters as "practical knowledge on sustainability"; and 3) outline and propose a direction for establishment of "East Asian disaster humanities."

5. 本年度の研究実施状況

本年度も 5 回の研究会を実施した（通算第 6 ～10 回）。第 6 回は、北京外国語大学が主催する国際フォーラム「2022 中日韓区域合作与発展論壇」にて多々納班員が基調講演をおこない、また山泰幸班長と張政遠班員がセッションを組み報告をおこなった。第 7 回は、ゲストの陳亮全先生から台湾の大規模災害について、都留俊太郎班員から台湾の災害と水利用について発表があった。第 8 回は国際総合防災学会（IDRiM）にてセッションを組み、山班長、岡田憲夫班員、清水美香班員、大西正光班員、張班員、梶谷真司班員が登壇して、地域住民と人文科学研究者との間のフィールドでの対話についての問題を議論した。第 9 回は、ゲストの植村善博先生と竹内晶子先生から東アジアの禹王信仰と災害文化について発表があった。第 10 回は、阿部健一班員からレジリエンスの問題を中心に、またゲストの塚本明日香先生から中国の災異記録についての報告があり、災害をめぐる言葉や記録の面から討論がおこなわれた。

6. 本年度の研究実施内容

2022-05-27 中日韓災害防治与安全保障国際合作（2022 中日韓区域合作与発展論壇） 東アジア災害人文学の構想 発表者 山泰幸 関西学院大学 巡礼と物語―災害の記憶をめぐって 発表者 張政遠 東京大学 東日本大震災の記憶と語り 発表者 金暎根 高麗大学校 中国緊急事態管理改革及び災害 NGO の発展 発表者 全成坤 翰林大学校日本学研究所 防災・減災における日中国際協力と将来への展望 発表者 伍国春 中国地震局地球物理研究所

2022-07-23 台湾の災害 台湾の大規模災害におけるコミュニテイ復興及びその手法の比較――集集大地震とモラコット台風を対象に 発表者 陳亮全 台湾国立防災救助技術センター 災害と共に生きる――20 世紀台湾農村における水利用 発表者 都留俊太郎 人文科学研究所

2022-09-22 Field-based efforts to promote communicative dialogues with local residents and researchers from humanity science- study of an implementation gap 発表者 Yoshiyuki Yama（山泰幸）関西学院大学 発表者 Norio Okada（岡田憲夫）関西学院大学 司会 Mika

Shimizu（清水美香） 総合生存学館　コメンテーター Masafumi Onishi （大西正光） 防災研究所　コメンテーター Ching-yuen Cheung（張政遠） 東京大学　コメンテーター Shinji Kajitani（梶谷真司） 東京大学
2022-10-08 東アジアの禹王信仰と災害文化 日本の禹王遺跡と災害文化 発表者 植村善博 佛教大学名誉教授、治水神・禹王研究会会長 大禹研究の現状と中国との交流 発表者 竹内晶子 治水神・禹王研究会理事・事務局長
2022-12-03 災害の言葉と記録 言葉にこだわる：レジリエンス・共感・「関係価値」 発表者 阿部健一 総合地球環境学研究所 天意としての災異の記録―正史「五行志」の中の災害 発表者 塚本明日香 岐阜大学

7. 共同研究会に関連した公表実績
国際フォーラム『2022 中日韓区域合作与発展論壇』におけるセッション「中日韓災害防治与安全保障国際合作」(2022-05-27 on Zoom).
国際総合防災学会 IDRiM 2022 Special session 13: Field‐based efforts to promote communicative dialogues with local residents and researchers from humanity science -- study of an implementation gap （2022-09-22 on Zoom).

8. 研究班員
所内
向井佑介、岡村秀典、岩城卓二、矢木毅、村上衛、平岡隆二、都留俊太郎
学内
多々納裕一(防災研究所)、矢守克也(防災研究所)、中北英一(防災研究所)、上原麻有子(文学研究科)、大西正光(防災研究所)、山口敬太(工学研究科)、清水美香(総合生存学館)、冨井眞(文学研究科)
学外
山泰幸(関西学院大学人間福祉学部)、梶谷真司(東京大学大学院総合文化研究科)、小川伸彦(奈良女子大学文学部)、鍾以江(東京大学東洋文化研究所)、関谷雄一(東京大学総合文化研究科)、張政遠(東京大学総合文化研究科)、岡田憲夫(関西学院大学災害復興制度研究所)、阿部健一(総合地球環境学研究所)、寺田匡宏(総合地球環境学研究所)、嶋田奈穂子(総合地球環境学研究所)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数 総計	受入人数 海外研究者	受入人数 若手研究者（40歳未満）	受入人数 若手研究者（35歳以下）	受入人数 大学院生	延べ人数 総計	延べ人数 海外研究者	延べ人数 若手研究者（40歳未満）	延べ人数 若手研究者（35歳以下）	延べ人数 大学院生
学内（法人内）	1	11		1	1		19		1	1	
		(2)					(2)				
国立大学	3	5	1	1			12	3	2		
		(1)		(1)			(2)		(2)		
公立大学	0										
私立大学	1	2					10				
大学共同利用機関法人	1	1					1				
独立行政法人等公的研究機関	0										
民間機関	2	2					2				
		(1)					(1)				
外国機関	5	15	15				21	21			
		(6)	(6)				(8)	(8)			
その他 ※	0										
計	13	36	16	2	1	0	65	24	3	1	0
		(10)	(6)	(1)	(0)	(0)	(13)	(8)	(2)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
新型コロナウイルス流行の影響により、班員の研究会参加旅費、ゲストスピーカーの招へい旅費などが使用できなかったため。

14. 次年度の研究実施計画
次年度も計５回の研究会を実施する予定である。昨年度に引き続き、基本的には定例の研究会を実施するほか、国際総合防災学会（IDRiM）にて、東アジア災害人文学に関するセッションを組むとともに、中国及び韓国の研究機関との共催による国際シンポジウムを実施する予定である。特に、次年度は、韓国に関する災害人文学に関する研究発表を中心に研究を進めていく予定である。また、本研究班に所属する京大防災研のメンバーから、防災学の立場から災害人文学との接点を探るような研究発表を行う予定である。すでに準備が進んでいるものとしては、京都大学総合博物館の災害関連展示の見学とディスカッション、オギュスタンベルク教授と上原班員による日本哲学、特に風土学に関する研究会などを予定している。また、人文研アカデミーの企画として一般向けのシンポジウムを開催し、班長と班員３名による講演を予定している。

15. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	5	30000円×10人	300000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費	2	100000円×１人	200000
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				200000
消耗品等経費				50000
その他				
合計				750000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

最終年度であり、研究期間の終了後、研究成果を出版する予定である。そのための準備として研究会及び国際シンポジウム等を継続的に実施していく予定である。また、それらの成果を一般にひろく発信するため、2024 年 2 月 17 日に人文研アカデミーのシンポジウム「気候変動・災害多発時代に向き合う人文学――東アジア災害人文学の挑戦」を企画している。